

飛鳥・藤原宮発掘調査概報 4

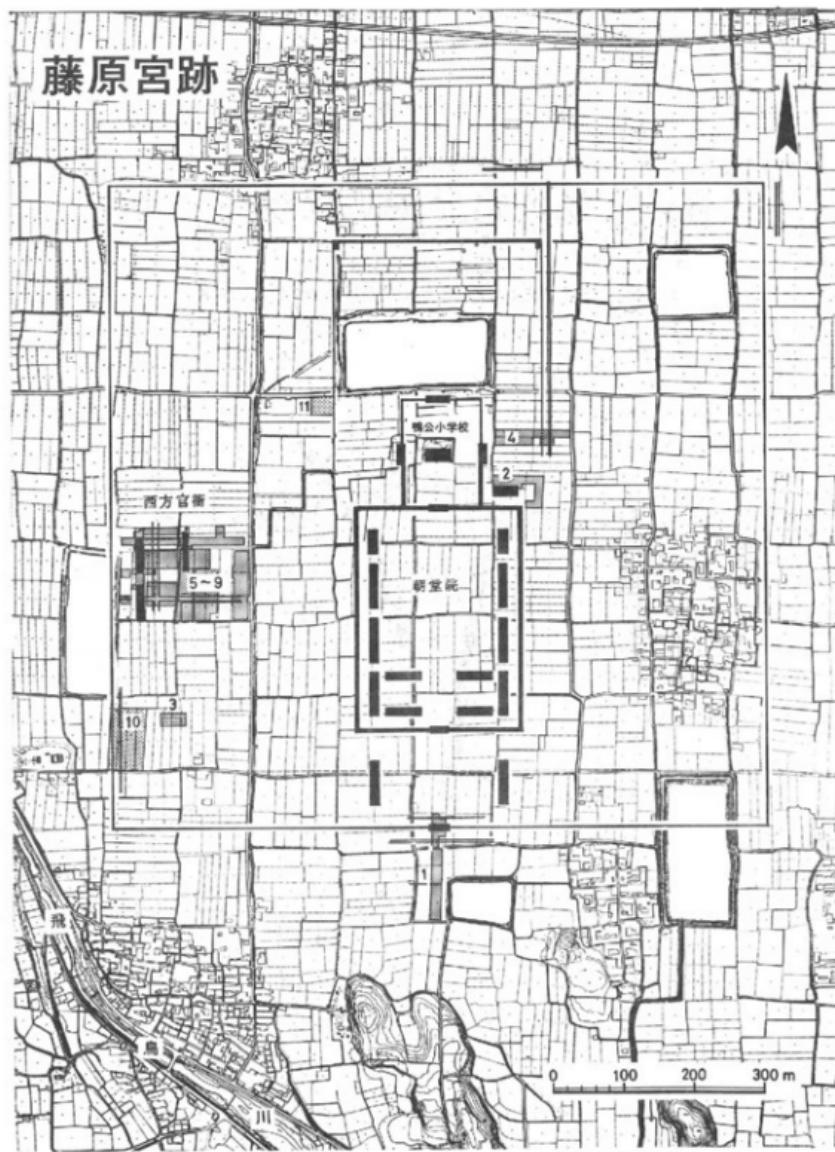
藤原宮・小墾田宮推定地・川原寺・大官大寺・藤原京南西地区



昭和 49 年 2 月

奈良国立文化財研究所

藤原宮跡



網:調査地 数字:調査次数

飛鳥・藤原宮発掘調査概報 4

目 次	藤原宮第8・9次および10次の調査	8
	小塙田宮推定地第2次の調査	8
	藤原京南西地区の調査	15
	川原寺の調査	18
	大官大寺跡の調査	25

飛鳥藤原宮跡調査室は、昭和48年4月12日をもって、新に飛鳥藤原宮跡発掘調査部として発足した。部長以下20名余の職員を擁し、地元の方々の協力を得て、飛鳥・藤原地区の遺跡の調査研究にあたっている。

昭和48年度は、藤原宮跡・小塙田宮推定地・川原寺跡・坂田寺跡・大官大寺跡・奥山久米寺跡・藤原京南西地区等で発掘調査を実施した。また奈良県と共同で紀寺跡の調査にもあたっている。これらの調査は、いずれも諸工事にともなう事前の緊急調査として行なったものである。

藤原宮跡では、鴨公小学校建設地（西方官衙地区）の調査を昭和47年3月から開始していたが、48年9月で全城の調査を終了した。小塙田宮推定地の調査は昭和45年に実施したことがあり、今回はその西に隣接する地区で調査したが、石組大溝を除いては前回ととくに関連する遺構は検出されなかった。川原寺の調査は整備工事にともなって行なったもので、東大門・東南院跡を確認した。坂田寺の調査は47年に引続くものであり、現在進行中である。大官大寺の調査は、寺域の北西隅付近と推定される地区で行なったが、小範囲の調査であったため、遺構の性格等は明らかになっていない。藤原京南西地区は、厩坂寺あるいは石川精舎にかかることが予想される地域であるが、調査した地区は旧河川にあたっていた。奥山久米寺はいずれも家屋改築にともなうものであり、小範囲の調査にとどまつた。

飛鳥・藤原宮発掘調査地区一覧表

49-2-20現在

遺跡・調査次数	調査区域	調査年度	調査期間	地籍地番	所有者	備考
藤原宮 8 9	6AJG	15.000	48.4.1~ 48.9.30	櫛原市御手町 801-3, 316-1, 317- 1, 318-1, 319-25 327-1-2, 328, 329- 1-2, 330	櫛原市	鶴公小学校建設地。第5~6・ 7次に引続く調査。発掘面積地 番には5次~7次をふくむ。
	6AJG					
10	6AJL	1.000	48.10.1~ 進行中	櫛原市四分町 297, 298, 300, 301	櫛原市	櫛原市四分町治地設地 宮の西側の溝・導溝を確認
11	6AJF		49.1.28~ 進行中	櫛原市御郷町金崎 15-1	森村栄太郎	内裏外房西隣附近
築-1	6AJK	300	48.4.2~4.20	櫛原市御手町河出 189-1-8	杉本吉男	水田を宅地造成 掘立柱穴・溝出土
築-2	6AJB	220	48.7.11~13	櫛原市真城町 310-1, 311-3	坂本一雄	住宅・納屋の新築
築-3	6AJC	30	48.8.80~81	櫛原市高殿町南京殿 285	喜多正義	農小駅の仮築 窓・瓦器出土
築-4	6AJF	30	48.12.5	櫛原市高殿町324	櫛原市	消防用防火明水灌設設置
築-5	6AJH	80	48.12.3~ 12.16	櫛原市飛騨町88	森本忠三郎	農業用雨水水分水槽工事にと もう調査 弁生式包含層
小野田宮 築定地	5A08	2,300	48.5.1~ 48.10.81	明日香村大字疊 17, 18	原良善	界営疊浦駅車場予定地の事前調 査。昭和45年の調査に続く。
川原寺	633H	2,000	48.9.6~12.15	明日香村大字川原93	国	川原寺の整備工事にともなう調 査。東大門・東南院・回廊東南 側の確認。
筑波寺	538T		49.1.15~ 進行中	明日香村大字筑波 175, 176, 192	国(施設)	筑波寺公園花戸地区 公園の 調査で、昭和47年に引続く
藤原京跡 西宮跡地	5B15	460	48.10.3~ 48.11.13	櫛原市石川町 252-1, 284-1~2 285-1	かとう 不動産	宅地造成・マンション建設にと もなう調査。
大安大寺	6AKB	640	48.11.15~ 12.22	櫛原市南須町2, 3, 4, 5	内井康裕	畠崎段にともなう奉幣調査。 大安大寺城の北西隅付近
奥山久米寺	5309	180	48.7.3~6	明日香村大字奥山612	細川泰義	畠崎改築にともなう調査 仙巻西北横行近
築-2	5B09	100	48.7.9~12	"	652	池崎正勝 "
築-3	5B09	50	48.8.22~24	"	24-5	木口次次 "
築-4	5B09		49.2.18~16	"	642	米田正之 "
紀寺	6DKI		48.5.8~ 49.2	明日香村小字キダラ 金崎	原良善	界営明日香源塾公墓建設にと もなう事前調査。原良善との共同 調査。紀寺の分地、金堂・講堂 中門・回廊・南大門等が伽藍 主要部を確認した。

※印 本報告に収容

藤原宮第8・9次および10次の調査

1 藤原宮第10次北半の調査

藤原宮第10次調査は、橿原市営四分団地造成に先立って実施したもので、鷺栖神社の東80m、藤原宮の西辺地区でおこない、目下発掘を継続している。

現在までに検出した主な遺構は、掘立柱建物4棟、柵2列、溝3条、土壙7ヶ所などである。調査地区西端にある南北柵Aは、宮城南門中軸線より西464mの位置にあり、藤原宮の西を限る大垣にあたる。柱穴は真南北に通っており、いずれも西側に柱抜穴がある。柱間は2.66m等間にわりつけられる。この柵列の東11.8mの位置に、幅2m、深さ0.6mで、南から北へ流れる南北溝Bがある。溝内埋土からは、完形の軒瓦、丸・平瓦が大量に出土した。掘立柱建物4棟は、いずれもこの南北溝の東で検出した。いずれも柱通りが真南北に対して東へわずかに振れている。発掘区の中央にある南北棟Dの桁行柱間は南2間分が広く、北3間分が狭い。この建物の東1.5mに、建物と柱通りのそろう南北柵Eがある。そのほかの掘立柱建物はいずれも小規模なものである。土壙には、古墳時代初期のもの1、6世紀中頃のもの1、7世紀中頃のもの3、藤原宮期のもの2がある。

南北溝内の藤原宮期の土壙Cより
柵が出土している。今までのところ最古の実例であろう。なお、
以上概略を述べた遺構は、弥生時代の土器包含層を掘り込んで作ら
れている。

南北溝Bからあわせて4点の木
簡が出土した。いずれも保存状況



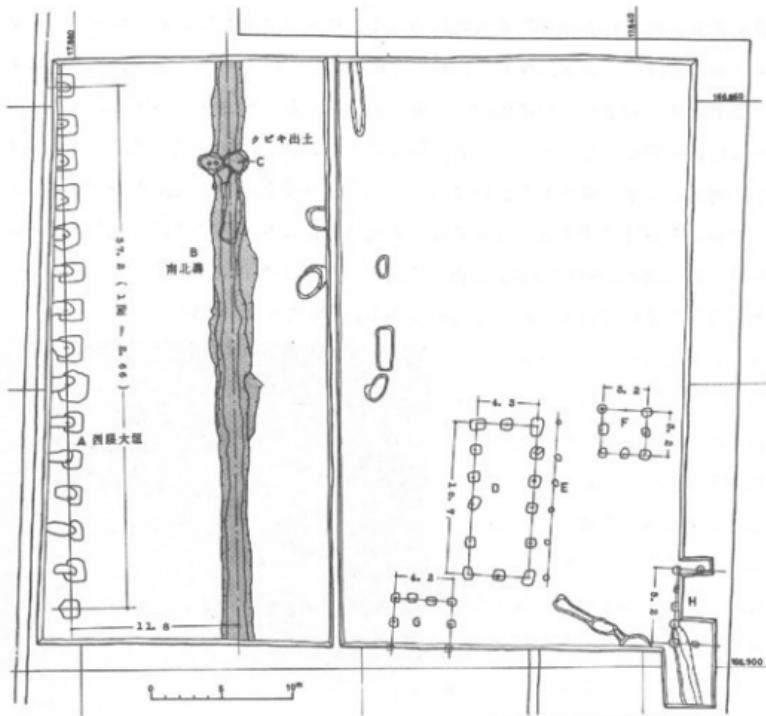
クビキ出土状況

が悪く、判読できる文字は少い。判読できる記文は以下の通りである。

- ① 六□□……
(衛力)
- ② ……□母□□□□□……
- ③ ……□一斗五□……
(升力)



西面大塁と溝（北から）



2 藤原宮第8・9次の調査 (鴨公小学校建設地の調査)

藤原宮西方官衙の調査は、「概報3」において第5次～7次までの経過を報告した。引続き第8・9次の調査をし、鴨公小学校移転地の調査を終了した。昭和47年春以来、1年半にわたり約1.5haの調査をし、この地域の遺構配置がほぼ明らかになった。検出した主な遺構は建物29、櫛5、井戸9、土壙6と道路およびその側溝である。これらの遺構は、A期とB期の2時期にわけられる。

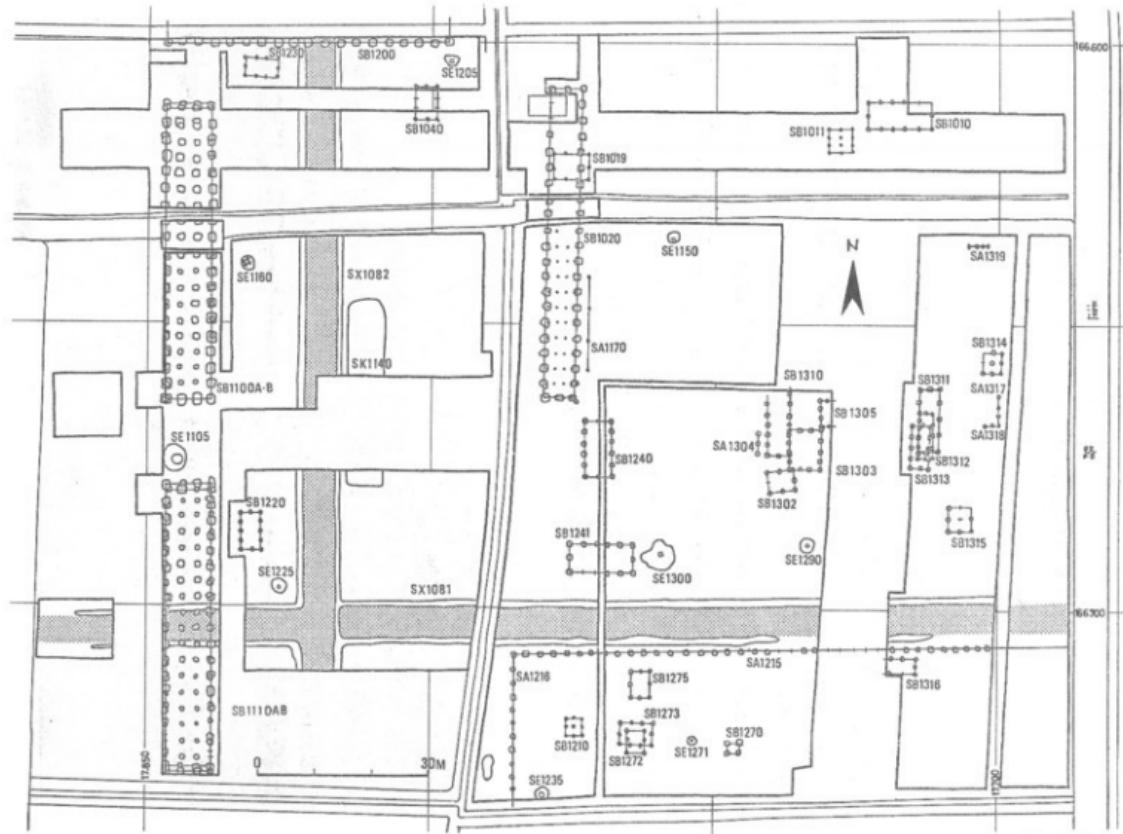
A期は藤原宮に関連する最も古い時期である。遺構は調査地の西南部で交差する東西および南北方向の道路SX1081・1082と、その両側の側溝がある。この溝は藤原京条坊割位置に一致するが、埋土から瓦の出土はない。道路によって四分割された東南部では、道路にそって櫛SA1215・1216で囲んだ一郭がある。今回の調査で櫛SA1215は4・3間分におよんだ。東端では側溝とともに削平されていて、検出できなかつたが、さらに東方に延長するものであろう。櫛の内側では、小規模の建物が6棟、道路をへだてた北側でも建物が11棟ある。なかには、建物が3棟重複していて、A期のなかで建てかえのあったことを示している。建物群の中には、小さな倉庫とみられる総柱建物を3棟検出した。この時期の建物配置は、まばらで特に計画性はみられない。

B期の建物は、道路を廃し、側溝を埋めて建設された。今回の第8・9次の調査では、この時期の遺構は検出しなかつた。しかし、前回までの調査で述べたように、調査地の西半を中心として桁行18間と20間の大規模な建物が4棟あった。その配置は、北に東西棟をとき、その南の両側、つまり、西に2棟、東に1棟の建物を配している。建物に囲まれた中央に大きな空間がある。さらに、今回の調査地に、B期の遺構が無かったことは、調査地の東半部に広大な空間があったことを示す。半城宮・平安宮の西辺地域は馬資に該当するが、B期の大規模な建物の計画的配置は、官衙の性格と関連するものかもしれない。

従来、未調査であった藤原宮の官衙について、遺構の配置が次第に明らかになってきた。B期が藤原宮の整備された時期の遺構であり、A期は藤原宮造営当初の姿を示す遺構がふくまれていよう。

时期	渠 壤	柱 高 根 柄 × 粗	根 柄 × 宽	时期	渠 壤	柱 高 根 柄 × 粗	根 柄 × 宽	时期	渠 壤	柱 高 根 柄 × 粗	根 柄 × 宽
A	SX1081 水面道路 (漂草6m)			B	SB1273 東西桿	3×2	5.0×3.6	B	SB1100A 南北桿	1.8×3	5.1.0×8.0
	SX1082 南北道路 (*)				SB1275 南北桿	2×2	4.8×3.6		SB1100D 南北桿	1.8×3	5.0.3×8.0
	SA1215 東西桿	4.3 以上	3.7 到= 8.3.1		SB1302 東西桿	2×2	3.6×3.4		SB1110A 南北桿	1.8×3	4.8.0×8.0
	SA1216 南北桿	1.1 以上	1.0 到= 2.3.0		SB1303 南北桿	4×3	6.5×4.0		SB1110B 南北桿	1.8×3	4.9.7×8.0
	SA1304 南北桿	2	2.8		SB1305 南北桿	3×2	4.7×3.2		SB1200 水面桿	1.8×	4.9.7×
	SA1319 水面桿	3	4.3		SB1310 南北桿	6以上×2	9.9×3.2		SB1020 南北桿	2.0×2	3.4.0×5.6
	SB1010 東西桿	5×2	1.1.1×4.8		SB1311 南北桿	4×2	9.2×3.8		SA1170 南北桿	3	1.6.2
	SB1011 南北桿 (漂草)	8×5 (粗枝)	3.9×4.1		SB1312 南北桿	4×2	7.3×3.2		SB1105 井戸		
	SB1019 東西桿	3×2	6.4×4.6		SB1313 南北桿	4×2	8.0×3.9		SB1150 *		
	SB1040 南北桿	3×2	5.7×3.7		SB1314 (漂草)	8×3	3.5×3.2		SB1160 *		
B	SB1210 (粗枝)	2×2	3.1×3.0		SB1315	2×2	3.8×3.5		SB1225 *		
	SB1220 南北桿	4×2	6.8×3.4		SB1316 水面桿	2以上×2	4.2×3.3 以上		SB1140 火 烟		
	SB1230 東西桿	3×2	5.6×3.2		SB1205 井 戸						
	SB1240 南北桿	5×2	1.0.5×4.6		SB1235 *						
	SB1241 東西桿	5×2	1.0.0×4.7		SB1200 *						
	SB1270	1×1	2.2×1.6		SB1300 *						
	SB1272 南北桿	2×1	4.2×3.2								

幕原宮第5~9次調査発掘遺構一覧表



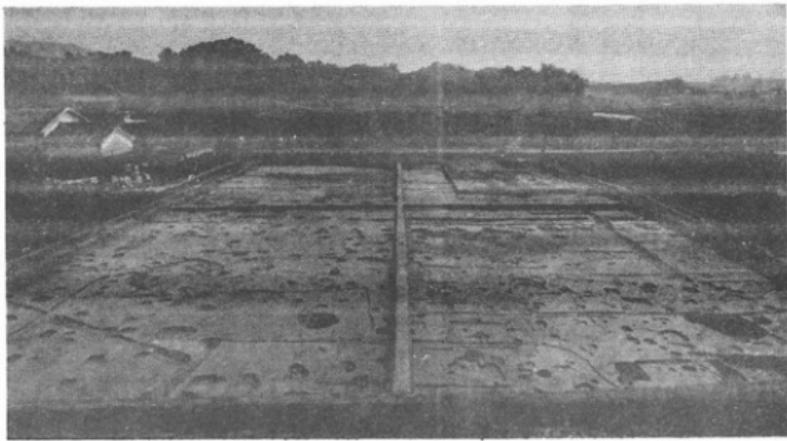
藤原宮第5～9次調査遺構配置図

小墾田宮推定地の第2次調査

調査地は、古宮土壇の西南約80m、岸俊男氏推定の「山田道」の北側で、昭和45年度に実施した第1次調査地の西方にあたる。従来、この付近一帯は小墾田宮跡と推定されており、第1次調査において、7世紀前半の溝や庭園遺構などを検出している。

調査の結果、この地域の旧地形は起伏しながら西北方へ傾斜しており、このゆるい傾斜地を盛土整地していることが判明した。検出した遺構には、堅穴住居4・掘立柱建物7・櫛9・溝7・土壇16・井戸1などがある。これらの遺構は6世紀以前（古墳時代）、7世紀代、8世紀代、それ以降の4期に大別できる。

古墳時代の遺構　　堅穴住居 SB160・161・162・163、土壇 SK240・245、井戸 SB290などがある。



調査地全景（北から）

SB160は隅丸方形で、東西4.6m、南北4.3m、現深さ0.1m、床面で柱穴を4個検出した。周溝・カマド等は検出されなかった。この住居は火災にあつたらしく、建築材が焼け落ちた状態で遺存しており、東寄りの床面上では土器が火災当時置かれていたままの状態で出土した。

SB161は長方形プランで、東西3.7m、南北4.9m、現深さ約0.1m、柱穴を4個検出した。周溝・カマドの施設は確認されなかった。

SB162は方形プランとみられるもので、南半はSD202によって破壊されており、全規模は不明である。東西4.8m、現深さ0.1m、柱穴を4個検出した。東壁中央にカマドの施設がある。周溝はめぐらされていない。

SB163はSD202・SK260によって破壊されており、東壁の中央にカマドの一部を検出したのみである。カマドは直接東壁に粘土で作り付けられており、その中央下部より住居外に煙道が延びている。

これらの竪穴住居は、出土遺物により、5世紀末葉(SB160)と6世紀前半(SB162)の二時期に分けられる。前者にはカマドの施設はないが後者にはみられた。SE290は径約1.3m、深さ0.55mの素掘りの井戸である。SK240からは布留式土器が、SK245からは6世紀中頃の土器が出土した。



竪穴住居(SB160)

7世紀代の遺構

掘立柱建物 SB165・170
・180・187、槽 SA195・
196・197・198・203・20
4、溝 SD050・200・201
・202・210・211、土塙 SK
249・250などがある。

SB165は8間×3間
(18.8×5.3m)の東西
棟で、真東西に対して西
で10°北に傾いている。
いずれの柱穴にも柱痕跡

が認められたが、西妻柱穴は検出できなかった。

SB170は建物の北半部が発掘区外のため全規模は確認出来なかつたが、3間(5.7m)×2間以上の総柱の建物と考れられる。真東西に対して西で20°南へ傾いている。

SB180は4間×2間(6.0×4.0m)の建物で、真東西に対して西で33°北へ傾いている。柱穴の大きさは均一でなく、柱痕跡も一部にしか確認されなかつた。

SB187は7間×1間(15.1×2.2m)の東西棟で、真東西に対して西で1°北へ傾いている。南側柱列には、すべて柱痕跡が認められたが、北側柱列では一部検出されたのみである。

SA195は5間(柱間2.1m)で、真北に対して北で1°東に傾いている。

SA196はSB187の北側柱列の北側で検出した7間(柱間2.1m)の東西棟で、SB187の北側柱と重複しており、SB187の北側柱の建てかえを示すものであろう。

SA197は南北棟で、南端で西へ直角に折れ曲がりSA198となる。いずれも発掘区外へ延びるため全規模は不明であるが、SA197は11間(柱間1.75~2.2m)分、SA198は2間分(柱間1.75m~2.2m)を検出した。SA197は真北に対して北で3°西に傾いている。

SA204は3間(柱間3.4m)の東西棟で、SB170と柱筋がそろっている。SA203は3間(柱間1.1m)の南北棟で、真北に対して北で28°西へ傾いている。

SD050は第1次調査で検出した石組溝の北西延長部にある。この溝は7世紀前半の整地層を埋り込んで作られている。北岸は0.2m~0.5mの大河原石を2段積あげて側壁としている。南と東側は土壤によって破壊されていた。SD206は全長11m、幅約0.7m、深さ0.6mの素掘りの南北溝で、溝中より7世紀後半の上器が出土した。

SD200はSD201にはほぼ平行の位置にある素掘りの大溝で、全長16m以上、幅約3.8m、深さ約0.5mである。

SD201は南東から北西に向けて流れる素掘りの溝で、全長27m以上、幅1.15m深さ約0.2mで、真東西に対し西で12.5°北へ傾いている。SD202は西流する素掘りの東西溝で、全長26m以上、幅約2m、深さ約0.15mである。

SD210は全長14m以上、幅約0.6m深さ約0.1mの素掘りの溝で、真東西に対して西で23.5°北に傾いている。西端でSD211に連なる。SD211は全長5m以上、幅0.75m、深さ約0.3mの素掘りの溝で、真北に対して北で約8°東に傾いている。

これらの遺構は出土遺物より、2期に分けられる。7世紀前半の遺構には、SB165・170・180、SD050・200・201・202・210・211、7世紀後半の遺構には、SB187、SA195・196・197・198、SD206、がある。

8世紀代の遺構　　掘立柱建物SB175・185・186、柵SA190・191、溝SD205、土壙SK260・270、井戸SE295などがある。これらの遺構は、8世紀初頭の遺物を含む盛土整地層の上で検出したものである。

SB175は2間以上×3間(4.7m)の東西棟である。真北に対し北で約1°西に傾いている。

SB185は4間×2間(8.8×3.2m)の東西棟で、この西に並ぶSB186は3間×1間(2.3×1.8m)の東西棟である。いずれも真東西に対し西で1°南に傾いている。これらの建物の柱穴の掘りかたは不揃いである。

SA191は4間の南北柵(柱間約2.5m)である。真北に対し北で1°西に傾いている。SB175の西妻柱列と柱筋がそろっており、この建物に取付いていた可能性もある。この柵は南で西へ直角に折れ、SB185・186の南側を通る東西柵SA190となる。SA190は今回15箇所検出されたが、さらに西方へ延びている。真東に対して西で1°南に傾いている。柱間は2.5mである。

SD205はSA190の南2.4mのところにあり、これと平行する東西溝である。幅約1m、深さ0.1m～0.8mである。両端は発掘区外に延びるが、全長4.1mを検出した。

SK260はSA190の南12mの位置で検出した。東西に長い溝状の土壙で、西は調査区外に延びるが、全長27m以上、幅6m～3m、深さ0.1m～0.4mである。溝東端で神龜の頃の土器を多量に検出した。

SK270はSB185・186、SA190と重複しており、これらの建物より新しい。

SE295はSK260の北岸にある。円形の素掘りの井戸で、直径約2m、深さ約1.7mである。

これらの遺構のうち、SB175・185・186、SA190・191、SD205は、同一時期の造営になるものと考えられる。すなわち、SB175、SA190・191は柱筋をそろえていることから一連のものと考えられること、SA190もSB185・186もSK270に破壊されているが、SK270の出土遺物より、これらの遺構は8世紀はじめのものとみられる。SK260も出土遺物から8世紀前半のものとみられる。

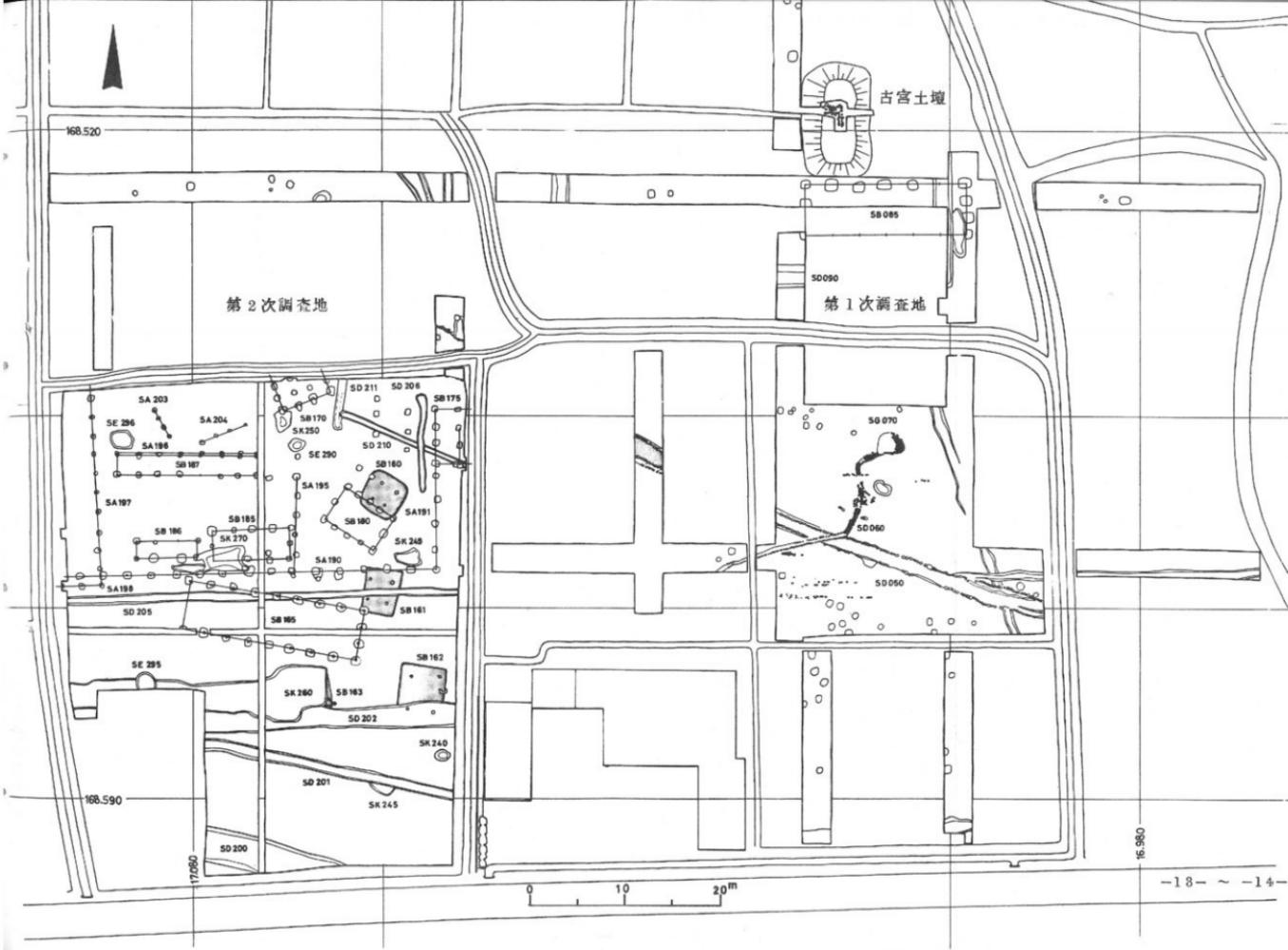
以上の古墳時代から奈良時代にわたる遺構群の他に、中世の東西方向の溝、南北方向の溝、土壙、井戸SE296などを検出した。

遺物　　土師器、須恵器、瓦器、弥生式土器、瓦、石礎、石製模造品、鉄製の小型馬銭などがある。SK260出土土師器には「口家小万呂」と墨書したものが一点ある。瓦の出土量は多くなく、北半部ではほとんど出土しなかった。

以上、発掘調査の概要を記したが、各期の遺構の配置、方位をみると、7世紀後半より8世紀初めの遺構は、ほぼ真北方位をとり、遺構が関連をもって配置されているのに対し、7世紀前半の遺構は、いずれも方位がふれており、関連性をもって造営されたとみられる遺構群は明瞭でない。ただし、7世紀前半の遺構には、方位が真東西に対して西で 10° ~ 30° 北へ傾いている遺構の多いことが指摘でき、これらが古い地割りに関連していることも考えられるが、今後の課題である。ところで、第1次調査の際、今回の調査区の東方一帯に7世紀前半の盛土整地が認められたが、今回の調査では、この盛土整地層はわずかにSD050の付近で検出しただけである。8世紀初めには、今回の調査区の北半に新たに盛土整地を行ない、建物を計画的に造営していることが認められた。SA190は8世紀初めに盛土整地して造営した建物群の南限を区画する施設と推定される。

今回検出した建物は、7~8世紀にかけていずれも発掘区北半に限られており、南半にはみられない。このことは、南側を通る県道あたりが「山田道」と推定されていることを想起すると、この「山田道」と何らかの関係があるものかもしれない。しかし、7世紀前半には、県道下に入り込む大溝SD200などが存在しており、「山田道」の位置や造営時期等については今後さらに検討する必要があろう。

小堀田宮推定地第1次・第2次調査
遺構配置図 →

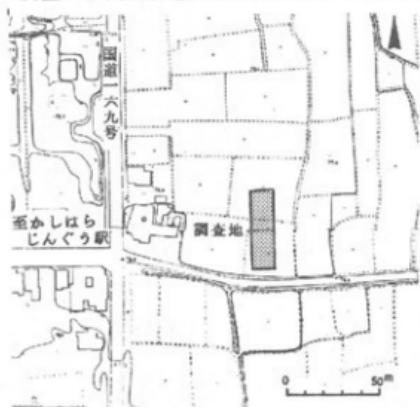


藤原京南西地区の調査

調査地は、近鉄橿原神宮駅前の東方200m、当駅東口より明日香村豊浦に通ずる県道のすぐ北側であって、推定藤原京の西南隅にあたる。周辺では、歴史時代の遺跡が数ヶ所で知られている。調査地の東方100m、「下ッ道」に重なる国道169号線をへだてた地域では、掘立柱建物などが発見されており、廢坂宮跡と推定されている。この南方に隣接するところで、花崗岩礎石、瓦などが発見されている。また、調査地の南方約100mの地点で、平安時代の土器出土の報告がある。石川精舎跡あるいは廢坂寺跡かと推定されている石川町ウラン坊の礎石出土地は、東方約800mである。

旧地形を概観すると、調査地は、丈六台地と五条野台地との間に南から北へのびる幅狭い谷の出口近くであって、この谷の中でも最も低い部分にあたる。水田畦畔も乱れており、谷水を集める川（桜川？）が、かつてはこの附近を流れていったことが予測できた。

調査は、共同住宅建設予定地を中心に、南北長42m、東西幅11mのトレンチを



設けて実施した。旧水面下約1mで、南より北へ流れる旧河道を確認した。

トレンチ内では岸を発見できず、深さは1m以上に及んでいる。堆積層は、砂と粘土が細かく互層をなしており、かなりの流水を物語っている。堆積層からは、各時期の遺物が無秩序に混在した状態で出土しているが、12・13世紀のものが主体をしめる。瓦器碗では、白石太一郎氏編年の第6

型式及び第7型式直前に相当するものが最も新しく、出土量も多い。したがって、この流路は、13世紀前半頃に形成されたものと推測できる。旧流路の堆積層上面で、土壌2ヶ所、小溝12条を検出した。小溝は、幅20cmの浅いもので、南北・東西両方向があり、この地域が水田化したことを証拠づける。出土遺物からみて、水田化の時期は13世紀前半頃であろう。

以上のような状況からみて、藤原京に伴なう遺構はあっても流出したものと判断し調査を終了した。

遺物は主に旧流路の堆積層から出土しており、弥生式土器（後期）、土師器、須恵器（古墳時代～平安時代）、瓦器、施釉陶器、土馬、土龜、瓦、銅鏡（隆平永宝1、富寿神宝1）などがある。多くは小破片であり、著しく磨滅している。ここでは、画像をえがいた土師器皿6点を紹介しておく。これらは旧流路堆積層中の小範囲から一括出土しており、いずれも完形ないし完形に復元できる。土師器皿は口径9.1～9.5cmで、口縁部が小さく外反する。形態上二種に分類できる。aは、口縁部から底部へなだらかに移行し深さが1.8cm前後のもの（① ④ ⑤）であり、bは、口縁部と底部との境界が、わずかに屈折する深さ1.4cm前後の浅い形態のもの（② ③ ⑥）である。いずれも内面と口縁部外面とをヨコナ



出土の絵皿

左上から①②③
右上から④⑤⑥

デし、底部外面は指先でおさえつけたままである。皿の内面には人物座像を墨でかき、その右側に人物名を墨書している。①～⑤の底部外面には、表面画像の頭部にあたる位置に「上」の墨書がある。画像の概要と人物名の仮文は次のとおりである。



①鳥帽子をかぶる男子像。墨書名「延末」



②頭髪をすりおろした僧形の男子像。墨書名「義明房」



③頭髪が逆立ち、上半身裸の男子像。左手で剣をさげもち、右手にも持物があるが何物かはわからない。墨書名「□□神王」

④女子像。墨書名「延末女」

⑤鼓を打つ様をえがく。墨書名「不知姓御子」

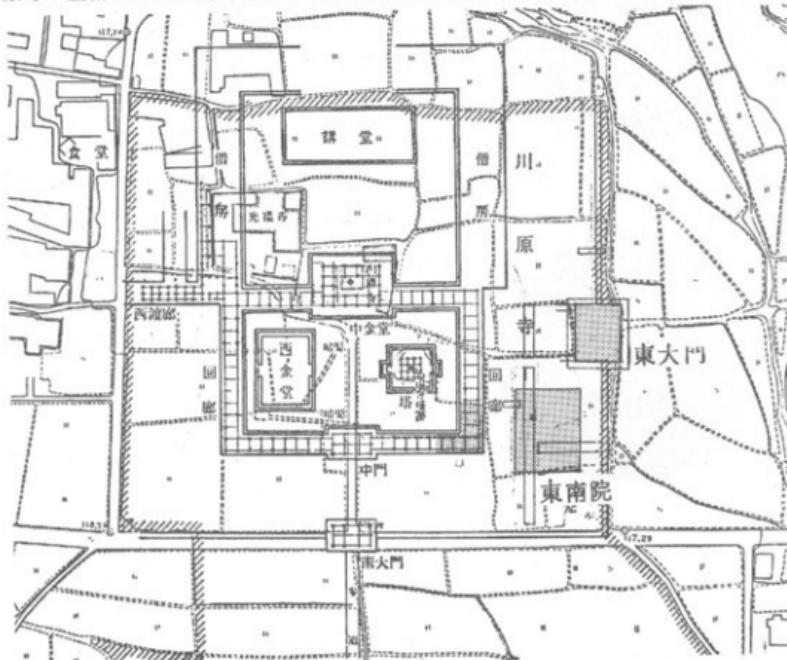
⑥墨書名「薬師」

⑤⑥は、④の例と表現が酷似しており、女子像であろう。これらの絵は稚拙ではあるが、手なれたえがき方であり、筆法も酷似している。年代については、土師器皿の特徴及び伴出瓦器から13世紀前半期のものとみられる。墨画、筆蹟の上からもこの年代には矛盾しない。絵皿の用途については、類例の検討をまって改めて論ずることにしたい。

川原寺の調査

川原寺東大門・南面回廊・東南院跡で行なった発掘調査の概略を報告する。

川原寺については、すでに昭和32・33年度の当研究所の発掘調査によって、伽藍主要部が明らかになっている。すなわち、中軸線上に南から南大門・中門・中金堂・講堂が並び、中門から中金堂へめぐる回廊に囲まれた内庭には塔と西金堂が向き合って立ち、また、講堂をとり囲んで僧房を配した伽藍配置である。しかし、東大門・東南院・回廊の一部などについては未調査であったので、今回、川原寺の整備のための資料を得ることを兼ねて発掘調査を行なうことになった。

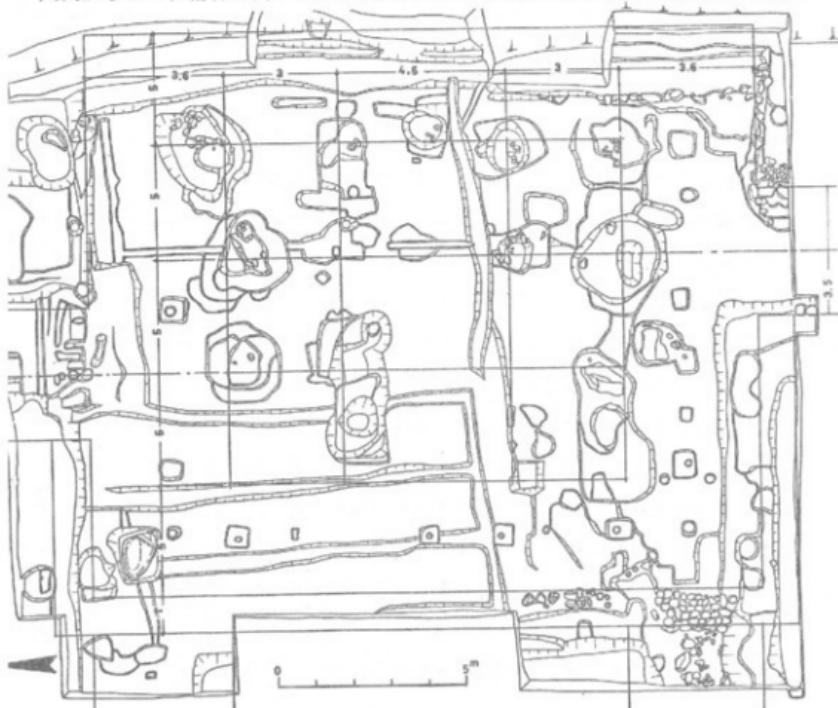


川原寺伽藍主要部

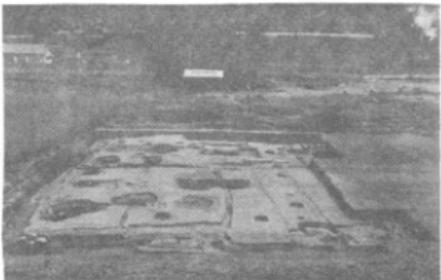
1. 東大門および築地

東門跡は前回の調査の結果や地形から塔心礎の東方約60mのやや北寄りのところにその位置が推定されていた。今回の調査によって、この位置で東大門を確認した。門の基壇上面は全面削平され、基底部がわずかに残るのみであり、東端は後世に土を掘り取られ一段低くされており、破壊されていたが、礎石抜取り穴やわずかに残る雨落溝などから、門跡とこれに取付く築地とをほぼ明らかにし得た。

門の基壇の規模は、復原すると、東西15m・南北17.7mと推定できる。基壇の南面東寄りの基底部では、外面を削えて並べた大きい玉石（長径0.5～0.6m）が東西に約3m検出された。この玉石列は地覆として基壇の周囲にめぐっていたものと思われる。西面南寄りでは基壇をとりまく玉石敷の雨落溝の痕跡を検出した。雨落溝は内幅約1mと推定される。門の規模は礎石据付け掘りかたや礎石抜取り穴列からみて、桁行3間、梁間3間に復原できる。柱間は桁行が中央間約4.5m



(15尺)・両脇間3m(10尺)、梁間は約3m(10尺)等間、基壇の出は側柱心から約3m(10尺)を測る。この側柱の外回り基壇上に門の柱筋と平行して約1~4m間隔で並ぶ掘立柱穴を検出した。これは門造當時の足場用の柱穴と考えられる。



東大門跡（北から）

門の基壇は旧地表と推定される面より1mの深さまで掘込地業をおこない、黄色粘土と灰緑色砂土とを交互に突固めた版築となっている。この版築は基壇の西側と南側では基壇端から外側3m以上にまで広く及んでいる。しかし、基壇北端部は、基壇端から0.5~1mの範囲は黄褐色粘土を積みあげて基壇土とし版築が認められない。

基壇の周囲で大きな瓦溜めを検出した。この瓦溜めは門の基壇端・雨落溝を一部破壊して掘り込まれている。焼土とともに川原寺創建時から平安後期にいたる軒瓦が大量に出土しており、建久2年の川原寺焼失の後、瓦の処理のため基壇周囲に掘り込まれたものと考えられる。この瓦溜めからは凝灰岩の小片が2点検出されたが、東大門基壇が中門等のように、凝灰岩の化粧石によっていたかはなお明らかでない。

門の両脇には築地が取り付く。築地本体は削平されていたが両取り付き部では東面築地の基底部がともに門の基壇地業上にそのまま続いているのが確認された。南に延びる築地は門の東第二柱列、北に延びる築地は東第三柱列に心を合わせており、門をはさんで南と北では築地のとりつく位置が約3mずれている。この築地のすれば再建によって生じた可能性も考えられたので、門の北方約28m・南方約34mの位置に東西トレンチを入れて調査した。しかし、結果は同じであり、東面の築地は創建当初より、門の南と北とではずれを持っていたことが明らかになった。南へ延びる築地の両基壇端には門と同様に玉石が並べてあったが、雨落溝は確認できなかった。南へ延びる築地の基底部の幅は3.5mであり、北へ延び

る築地も同様であろう。築地基底部の築成は、門基壇のような整った版築によるのではなく、粘質土を数層積み重ねたものである。

東大門には南北の築地のほかに、西へ延びる2条の東西築地が取り付く。この2条の築地は、門基壇の西面の南北両端に取り付くもので、築地基底部両端を門の基壇端に、心を妻側柱列とにそろえていたものと復原し得る。築地基底部の築成は粘土を厚く数層積み上げたものである。築成土中には瓦が含まれており、これらの築地の築造が創建時より時期の下る可能性がある。

2. 東南院¹⁾

発掘地は東大門の南西の隣接地である。南北に3×50m、東西に3×6m・3×17mの3本のトレンチを設定した。

調査の結果、基壇積土が遺存しているのを確認した。基壇規模は東西約22m・南北約26mである。基壇の東側では雨落溝を検出した。素掘りの溝で、石敷などは認められなかった。基壇土上で南北に4.8m間隔で並び、ほぼ原位置にあるとみられる礎石を2個検出した。基壇は瓦を含む茶褐色粘質土を厚さ20cmほど積み上げたものである。この基壇は9世紀中頃の土器を含む土壤によって破壊されていることから、9世紀中頃以前に造営されていることが明らかであり、また基壇土中に瓦を含むことから創建までは遡らない時期のものと推定できる。この東南院一画の旧地表と考えられる面は、中心伽藍や東大門がほぼ同一平面上に造営されているのに対し、約0.5m低くなっている。

3. 回廊跡

回廊については、昭和32・33年度の調査で規模が明らかにされている。しかし、回廊基壇の築成方法や回廊内雨水の排水施設については未調査であったので、今回はこの2点を明らかにするため、回廊の東南隅で調査を行なった。

南面回廊の東から第2番目と3番目の礎石間の中央で、ちょうど東面回廊の西側の雨落溝の南延長上にあたる位置に2m×10mの南北トレンチを設定した。

調査の結果、回廊基壇及び回廊内の雨水を回廊外に排水するための暗渠と石組溝とを検出した。付近は回廊築成以前に整地されており数層の整地層が認められた。回廊基壇はこの整地層に掘り込み地業を行ない、砂質土と粘質土とを交互に

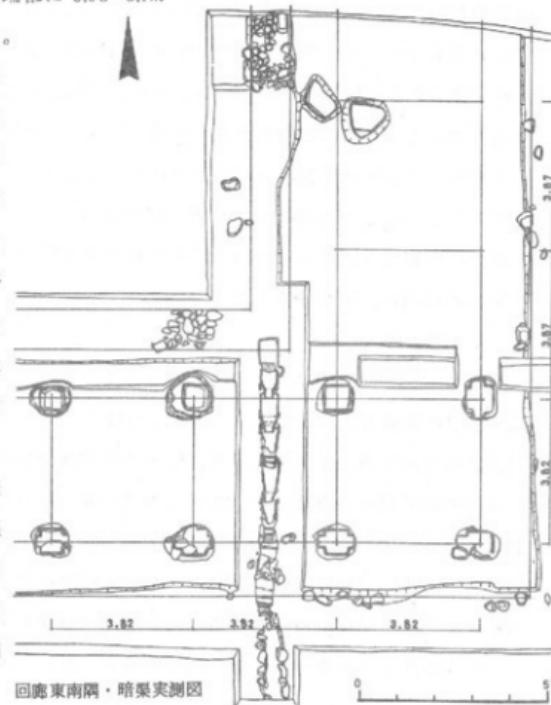
突固めた版築である。

排水施設は、南面回廊基壇を南北に横断する部分は暗渠、その南は石組溝となっている。暗渠は基壇の築成と同時にとりつけられたもので、7本の土管を南北に連結し、全長は6.7mである。土管は瓦質の円筒管状をなしているが、先端がすぼんだ形態で、外側5ヶ所に凸帯をはりめぐらしている。全長約1~1.1m、口径は後端部で0.44~0.5m、先端部で0.22~0.3mである。先端部を南に向かってこの口を次の土管の後端部に0.05~0.1m挿入して連結してある。

連結部分は土管の両端の口径差が0.2mほどあるため、接続の部分には大きな隙間が生じており、このため土管と土管との間隙に丸・平瓦を挿入したり、あるいは連結部分全体を上部から瓦で覆って土砂の流入を防いでいる。土管を据える際には底部凸帯を割り取り、裏込め状に土管の外側にあてている例が一部に認められた。暗渠と回



回廊・暗渠・溝



回廊東南隅・暗渠実測図

廊内側の雨落溝との接続部の状況は、後世の破壊が著しくその据付けの状態の全容は不明であったが、一部取付け部の底部は遺存しており、土管が接する雨落溝の凝灰岩底石を打ち欠き、両者が密着するように加工してあることを確認した。また入口には瓦や0.2m大の玉石がつめてあった。これは暗渠発掘後のものと思われる。暗渠の底面傾斜は入口と出口で約0.35mの落差がある。暗渠の南に接続する石組溝は開渠となっており、確認した全長は2.2m、内幅約0.3m、深さ約0.3mである。両側石に0.2~0.3m大の玉石を1・2段内側に面をそろえて並べている。この石組溝は回廊基壇の掘込み地業及び基壇外の整地層を掘り込んで造られている。暗渠及び石組溝の内の堆積土は、焼土・炭化物・凝灰岩片を含み、瓦や平安時代初頭の土器を検出した。なお、土管接続部分を覆う瓦の中には横方向の縄目の叩きのある平瓦が検出された。縄目の叩きを有する瓦としては現在のところ最も時期の遅る例である。

4. ま と め

以上発掘調査の結果からいくつかの新しい事実が明らかになった。まず、東大門が3×3間のプランをもち、南大門や中門より大規模な建物となる。これは東方に当時の主要な道路が存在していることに規制された結果であろうか。この東大門の基壇築成の状況は、版築による築成が、基壇南端では基壇外にまで広く認められるのに対し、北端では版築がとぎれ、別の粘質土を積んで築成されていることも興味深い事実である。東大門造営の当初計画にそって基壇築成を版築によって行なったが、建物造営の段階で計画変更し、北に移動して造ったためか、あるいは、版築による基壇築成の位置が計画より南にずれたことに起因するものと思われる。東大門の両脇に取り付く東面の築地が、門の南と北では東西に3mずれている点については、類例は少ないが、藤原宮の大極殿院西回廊が西棟の南と北とで東西にずれているという例もあり、今後検討すべき一つである。

東大門から西へ延びる二条の東西築地については、西方部分が未調査であるが、南側の築地は東南院を区画する性格のものではなかろうか。一方、北側の築地も同様に北部の建物を区画する施設である可能性が考えられる。

南面回廊跡で検出した土管の暗渠については他に例をみないものである。この

土管については東大門周囲の瓦溜めからも破片を発見しており、川原寺の各所で使用されていた可能性がある。しかし、この土管は、形態上土管中に土砂の充満しやすい点、土管の連結部の間隙の大きな点、使用時に凸帯を割って据えている点があることなどからして、本来暗渠用として製作されたものとするより、他の用途のものを転用した可能性が考えられる。資料の増加をまち、製作技法・用途などさらに検討する必要がある。

なお、調査全域から多量の瓦類を検出した。軒瓦については、前回の調査に新たに加える新型式のものは出土していない。このほか若干の工具類・埴仏が出土している。

注1 太子伝玉杯抄巻21「或記云、定恵和尚吾朝御住寺、橘寺北河原寺之内西南院御住、東南院弘法大師御住也、今西南院無之、東南院在之」

注2 東大門・東南院の位置

東大門の基壇中心は、塔心礎の東58.8m、北10.8m。東南院は同じく東42.3m、南19.8m。塔心礎は伽藍中軸線の東19.0mのところにある。

図面の座標

当調査部では、遺跡の実測にあたって、國土調査法による第6座標系を基準としている。本概報の図面に記入してある座標もこれによっている。例えば小墾田宮推定地の「古宮」につくつたベンチマークの座標は

$X = -168,518m\ 96$ $Y = -17,012m\ 53$ である。ただし図面ではX、Yおよび一を省略している。

既刊の概報

「飛鳥・藤原宮発掘調査概報 1」昭和46・2 小墾田宮推定地・豊浦寺跡・雷丘東方遺跡・藤原宮

「飛鳥・藤原宮発掘調査概報 2」昭和47・5 藤原宮第3次・第4次調査

「飛鳥・藤原宮発掘調査概報 3」昭和48・3 飛鳥資料館建設地・坂田寺・奥山久米寺・淨御原宮・藤原宮第5~7次

大官大寺跡の調査

調査地は、大官大寺講堂跡と推定されている土壇の北約100m、西約100mの地点で、想定中ノ道から約200m西へ離れている。この地域は大官大寺の寺地にはいることが推定されており、また飛鳥岡本宮の推定地でもあるが、ここに畜舎を建設するという届出があったので、事前に発掘調査を実施することとなった。

調査地に、まず南北方向のトレンチを設定し、次にこのトレンチと直角に東西トレンチを設けた。トレンチ設定に際して、畜舎建設予定地内の南半分にある一段低い水田は、後世の削平によるものと考えられたので除外した。

検出した遺構はすべて同一面にある。トレンチ内の層序は、上層から耕土一末土一黄褐色土一整地土（黄白褐色埴土一山土）一暗灰色砂土の順になるが、ほとんどの遺構は整地土上面で検出した。整地土の存在しない部分では、暗灰色砂土の上面が直接あらわれている。整地土は、厚さ10~15cmで調査範囲内のはば7割におよんでいた。整地はこの地域の建物造営にさいしてなされたものであろう。整地土下の暗灰色砂土は厚さ60~70cmあり、この下層は暗灰褐色粘土となる。なお、暗灰色砂土中から5世紀後半代の須恵器が出土している。

遺構には、掘立柱建物3・土壙9・溝4などがある。これらの遺構は出土遺物や重複関係からⅠ～Ⅲ期の3時期に区分できる。このうち、Ⅰ期はほぼ7世紀後半頃、Ⅱ期は7世紀末から8世紀初めの頃の年代が考えられる。Ⅲ期は中世に属するものである。

Ⅰ期の遺構　掘立柱建物SB101・SB102・SB103、溝SD104・105がある。SB101は、東西トレンチの東北隅で検出した東西棟である。梁行2間、桁行は1間以上で、発掘区外の東へおよんでいる。西妻中央柱穴では、柱穴は検出面から約1mの深さであった。西妻北柱穴には柱抜き取りの痕がある。柱間は梁行21m等間、桁行は23mである。方位はほぼ真南北をとっている。

SB102は同じく東西トレンチ内で検出した。南北棟でSB101の西南に近接している。梁行2間、桁行4間である。このうち南妻中央・西側柱列の南第1・2の柱穴は未掘である。柱穴は全体に浅く、検出面から30~50cmの深さである。柱間は、梁行が1.6m等間であるのに対して、桁行は北から1.8m、2.6m、1.8m、1.8mである。建物方位は北で西へわずかふれていっている。

SB103は南北トレンチ西辺部で検出した2間×2間の縦柱建物である。柱穴のうち建物西南隅は検出していない。柱間は約1.7m等間であるが、柱筋に多少のふれがある。柱穴は浅く、検出面から15~20cmの深さである。また建物方位が北で西へふれているが、このふれは、SB102建物のふれと等しい。柱穴の浅いこともSB102に共通している点から考えて、SB102とSB103は同時期の建物とみることができよう。

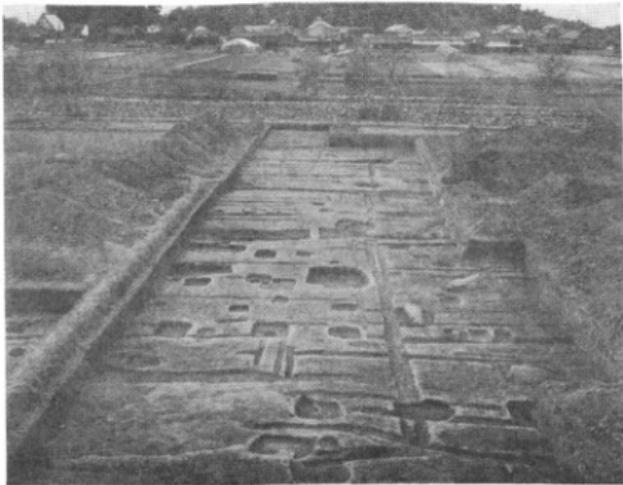
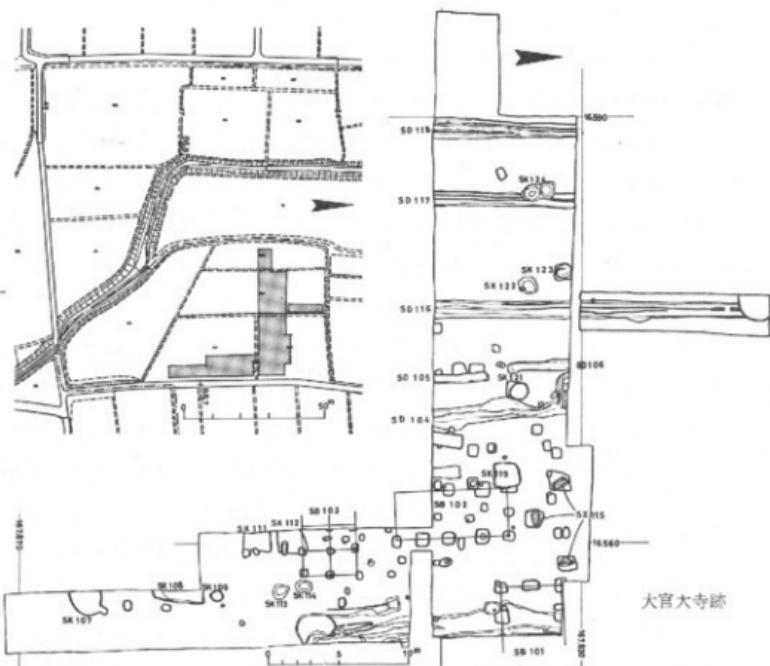
SB104は東西トレンチ中程で検出した南から北へ流れる南北溝で、やや北で西へふれており、発掘区北辺に近い部分で西へ延びる細い支流が一条ある。南北部分は幅1.2~1.5mで、深さ約70~80cmである。溝埋土から少量の須恵器と土師器が出土したが、瓦は含んでいない。

SD105・106は埋土の状況からみてⅠ期の遺構と考えられるが、遺物をまったく含んでいない。両者とも幅50~60cm、深さ5~8cmの浅い南北溝で、埋土は非常によく似ている。SD104からは約3m西にあり両者は並行している。SD105・106から西では、中世に属する遺構のみしか存在しないことは、この地区の遺構分布のうえで注目される。

花崗岩の大石SX115は東西トレンチの東部北側で検出した3個の石で、現状ではすべて上面は水平面をなさず、かつ形態も礎石とするには不整形であって、意味不明である。またそれぞれの石は、埋土に瓦を含む穴に落し込まれた状況にあり、Ⅰ・Ⅱ期の遺構の存在した時代よりもちに、この場所へ置かれた可能性が強い。なお、付近で礎石据えつけ穴等は確認されなかった。

Ⅱ期の遺構 土壙SK107~109、111~114がある。これらの土壙は、いずれも南北トレンチ内にある浅い土壙で、埋土にはすべて須恵器・土師器を含み、かつ瓦を含んでいる。Ⅰ期の遺構には瓦を含むものが無い点で区別される。

Ⅲ期の遺構 土壙SK119、121~124、溝SD116~118、土壙SK119・121~124があり、こ



調査地全景
(東から)

れらはすべて、瓦器等を含む溝であり、中世以降の遺構と考えられる。このうち、SK119は深さが検出面から約2mあり、井戸かとも考えられるが遺物をまったく含んでいない。SK121~124は、いずれも深さ60~70cm前後で、底面にはすべて炭化物が堆積していた。SK128からはカワラケ状の土師器小皿を検出した。

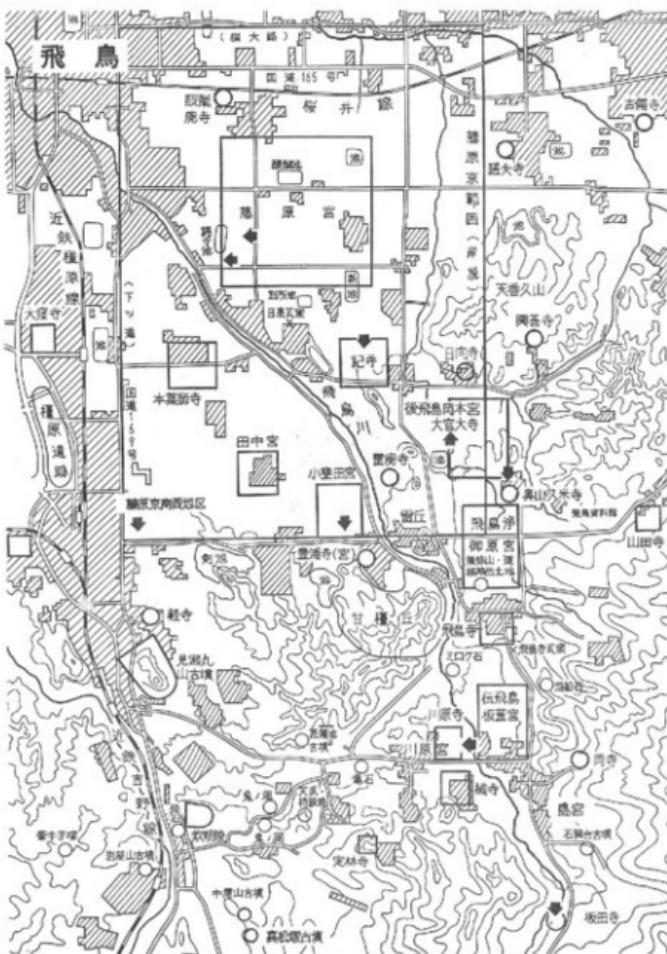
SD116~118はいずれも南北溝である。埋土中には、瓦・瓦器を含み明らかに中世以降の遺構と考えられるが、他の多数の小溝に比して幅広く、かつ深いのでとりあげた。この他に図示しなかった多数の中世の小溝がある。

遺物　　出土遺物は多くはなかった。しかしながら、建物SB101・102・103の柱穴の埋土中からはそれぞれ少量ながら土器が出土しており、これら建物の年代を決める手がかりとなる。また南北溝SD104の埋土からは、かなりの土器が得られたので、溝の存続の年代を知ることができた。瓦類は発掘区の全域からかなりの量を出土したがいずれも小破片で、かつ摩滅の甚しいのが特徴である。軒瓦も摩滅甚しく、文様も明瞭でないものがほとんどである。検出した軒瓦類はすべていわゆる大官大寺式瓦であって、他の型式の瓦はまったく含まない。

以上が今回の調査の概要であるが、一、二の知見を示すと次のようである。

1　検出した遺構の年代は、建物柱穴または溝等から出土した遺物からみて、7世紀後半から8世紀初めの頃と考えられる。したがって、検出遺構は飛鳥岡本宮または後飛鳥岡本宮より、大官大寺に属していた可能性が強い。

2　遺構分布の西限を知ることができた。すなわち、SD105・106以西には中世の遺構のみしか認められない。この点では、SD105・106が浅い不明瞭な溝であるのに対して、SD104は溝幅も広く深いので、むしろこのSD104の方が遺構分布範囲を示すうえでは意味を持つであろう。また、SD104とSD105・106の間は約8~4mあるが、この間が築地になるのかもしれない。そうすると、西側の遺構の分布しない部分には道路等が考えられよう。したがって、この部分が大官大寺の寺域の西限になる可能性は非常に強いといえよう。



矢印：調査地

表紙カット 表 藤原宮第10次調査出土クビキ（全長82cm）
裏 同 上 軒丸瓦・軒平瓦

